

表 3. 大阪土曜日常設検査における MSM 受検者に関する概要(年別)
 ～過去 6 ヶ月間の性行動について～

	2004(n=333)		2005(n=430)		2006(n=373)	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)
過去 6 ヶ月の性経験						
ある	305	(91.6)	374	(87.0)	327	(87.7)
過去 6 ヶ月の性交相手(複数回答)						
恋人・特定のパートナー	169	(55.4)	202	(54.0)	163	(49.8)
知人・友人とその場限りで	102	(38.9)	133	(35.6)	120	(36.7)
バー・クラブで会ったその場限りの人	89	(29.2)	80	(21.4)	94	(28.7)
ネット出会い系サイトで会ったその場限りの人	81	(26.6)	104	(27.8)	93	(28.4)
携帯出会い系サイトで会ったその場限りの人	47	(15.4)	56	(15.0)	47	(14.4)
風俗店等の従業員	23	(7.5)	28	(7.5)	21	(6.4)
風俗店等の客	13	5.0)	24	(6.4)	10	(3.1)
その他	7	(2.3)	6	(1.6)	12	(3.7)
過去 6 ヶ月のコンドーム使用(オーラルセックス)*						
毎回使った	12	(5.2)	27	(8.1)	29	(9.9)
使ったり使わなかったり	62	(26.7)	75	(22.5)	70	(23.8)
全く使わなかった	158	(68.1)	231	(69.4)	195	(66.3)
行為をしていない	13	-	9	-	17	-
無回答	17	-	32	-	-	-
過去 6 ヶ月のコンドーム使用(アナルセックス)*						
毎回使った	84	(39.6)	102	(36.4)	128	(50.8)
使ったり使わなかったり	106	(50.0)	130	(46.4)	94	(37.3)
全く使わなかった	22	(10.4)	48	(17.1)	30	(11.9)
行為をしていない	43	-	70	-	58	-
無回答	7	-	24	-	-	-
過去 6 ヶ月のコンドーム使用(膣性交)*						
毎回使った	26	(50.0)	31	(40.3)	34	(51.5)
使ったり使わなかったり	21	(40.4)	27	(35.1)	23	(34.8)
全く使わなかった	5	(9.6)	19	(24.7)	9	(13.6)
行為をしていない	137	-	189	-	163	-
無回答	73	-	108	-	98	-

注: MSM 受検者とは感染不安行為が「同性間の性的接触」と回答した男性

注: 過去 6 ヶ月間のコンドーム使用状況は、「行為をしていない」「無回答」を省いた値を母数とした

* のついた項目: 2004 年については 4 月～12 月の回答のみ(n=262)

大阪の予防啓発の評価に関するクラブ調査による研究

研究協力者：木村博和（横浜市健康福祉局）、鬼塚哲郎（京都産業大学/MASH大阪）
山田創平、辻 宏幸、後藤大輔（エイズ予防財団/MASH大阪）
市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

平成 18 年度までの大阪におけるゲイボランティアによるHIV予防啓発プロジェクトMASH大阪による各プログラムの効果を評価するため、2006 年 8 月クラブ調査のデータを用いて、予防啓発プログラム（コミュニティペーパーSaL+）への接触状況と、HIV/STI予防に関する知識や意識、行動との関連について分析した。質問紙の総回収数は 725 件、このうち近畿在住のMSM530 人（平均年齢 29.1 歳）を分析対象とした。

予防知識 6 問の正答数についてSaL+接触群（n=204）と非接触群（n=326）の平均値を比較したところ、接触群の方が高く（接触群 4.3 問 vs 非接触群 3.6 問）、各質問の正答率も 5 問で接触群の方が高かった。過去の性行為の感染リスクの自覚（感染危険あった：30.4%vs14.1%）や身近な陽性者の存在の認識（いる・いると思う：59.4% vs 41.8%）も接触群の方が高かった。性行為時のコンドーム使用状況や購入経験については両群間に違いを認めなかったが、抗体検査の受検経験はSaL+接触群の方が高かった（40.2% vs 32.8%）。

以上より予防啓発プログラム接触群では性行為時のコンドーム使用は多くないが、予防に関する知識や意識は高く、抗体検査の受検経験が多いことから、予防啓発プログラムによる受検行動への効果、影響の可能性が示唆された。今後、コンドーム使用以外の予防行動や性行為に関連する意識や態度について調査し、予防啓発プログラムの効果について評価する必要があると考えられる。

A. 研究目的

大阪ではゲイボランティアによる大阪地域のMSM (men who have sex with men) を対象としたHIV/STI予防啓発プロジェクトMASH大阪が、北区堂山のドロップインセンター（DISTA:ディスタ）を活動拠点として、さまざまな予防啓発プログラム展開している。その効果や影響については、同地区のゲイ向けクラブイベント参加者への質問紙調査を実施し、その予防に関する知識や意識、行動の動向を把握することによって検討してきた。

本研究班においても過去のクラブ調査と同様、2006 年 8 月にクラブイベント参加者を

対象として予防啓発プログラムへの接触状況やHIV/STI予防に関する知識や意識、行動に関する調査を行った。本年度は同調査のデータを用いてプログラムへの接触状況と予防知識や意識、行動との関連について検討することにより、その効果、影響について検討したので報告する。

B. 研究方法

調査資料には 2006 年 8 月に大阪市北区堂山地区で実施したクラブイベント調査のデータを使用した（詳細は本研究班平成 18 年度報告書を参照）。

分析対象者は、重複回答者を除外した上で、①自認するセクシャリティに関する質問にゲイまたはバイセクシャル、わからない、その他のいずれかと回答した人、あるいは②性行動に関する質問で過去に男性とセックスの経験ありと回答した人 687 人のうち、居住地を京都、大阪、滋賀、兵庫、奈良、和歌山のいずれかに回答した 530 人とした。

対象者を予防啓発プログラムへの接触状況の有無により 2 グループに分類し、2 群間の予防に関する知識や意識、行動に関する回答の違いを比較することにより、プログラムと予防行動等との関連について検討した。調査した予防啓発プログラム接触状況は過去 1 年間のコミュニティペーパー SaL+ の受け取り経験、予防知識は抗エイズ薬の延命治療への有効性、抗体検査のウインドウ期、迅速検査の正確性、コンドームのオイル易破損性、梅毒の感染性、STI 感染の感染力への影響の 6 項目、意識については感染リスクの自己評価、身近な感染者の存在、エイズや STI に関する相談先の 3 項目、予防行動はアナルセックス時のコンドーム常用状況、最後のアナルセックス時のコンドーム使用経験、コンドーム購入経験、HIV 抗体検査の受検経験の 4 項目であった。回答の差異の有無を検討する際には統計的検定の有意確率（おおむね $p < 0.1$ ）を指標として考慮した。統計的検定には質問の回答が名義尺度のときには χ^2 検定（Yates の補正あり）を、順序尺度のときには Mann-Whitney の U 検定を行なった。回答の集計、統計的検定にはパソコン用統計解析パッケージ HALBAU for Windows Ver. 5.44（現代数学社、京都、2002 年）を使用した。

C. 研究結果

1. 対象者の属性と施設等の利用状況

対象者の属性や施設等の利用状況について別表 1 に示す。平均年齢は 29.1 歳（標準偏差 6.6 歳）、SaL+ の受取り経験の有無別に

みると、あり群 28.7 歳、なし群 29.3 歳であった。居住地は両グループとも大阪が多かった。過去 6 か月間堂山地区に行く頻度や施設等の利用状況は、SaL+ 受取りあり群の方が多く、行動が活発であった。

2. HIVSTI 予防の知識と意識

SaL+ の受け取り経験別にみた対象者の HIVSTI 予防の知識や意識についての集計結果を別表 2 に示す。SaL+ 受取りあり群の方が、正答数合計が多く、「抗エイズ薬による延命治療」、「抗体検査のウインドウ期」、「梅毒の感染しやすさ」、「STI 感染の影響による HIV 感染しやすさ」、「コンドームを油性潤滑剤と併用すると破けやすくなること」についての正答率も高かった。受取りあり群の方が HIVSTI に関する予防知識が多い傾向が認められた。

過去の性行動の感染リスク自認についてみると、SaL+ 受取りあり群の方が「十分可能性があった」との回答が多く、「絶対ない」人が少なく、感染リスクを自認する人が多い傾向が認められた。感染者の身近な存在については、受取りあり群の方が身近に感じている（「いる」または「いると思う」の合計）人が多かった。エイズや性感染症に関する相談先では、受取りあり群の方がコミュニティセンタースタッフや電話相談をあげる人がやや多い傾向が見られた。

3. コンドーム使用状況について

SaL+ 受取り経験別にみた過去 6 か月間のアナルセックス時の相手・行為別のコンドームの使用状況を別表 3 に示す。いずれの場合のコンドーム常用率（「毎回使った」人の割合）も両群間に明らかな違いを認めなかった。「最後にしたアナルセックス」でのコンドーム使用でも、両群の使用率（「使った」と回答した人の割合）に違いは認められなかった。コンドーム購入経験についてみると、アナ

ルセックス経験者では半数以上が「ある」と回答し、その購入先はドラッグストア、コンビニ、ゲイショップの順であった。購入経験と年齢との間には特徴的な関係はみられなかった。

4. 抗体検査の受検状況について

SaL+受取り経験別にみたHIV抗体検査の受検経験に関する集計結果を別表4に示す。

過去1年間の抗体検査の受検率は受取りあり群の方がやや多い傾向がみられた。受検場所についてみると受取りあり群で「土曜午後の検査」が多かったが、そのほかの場所では明らかな違いを認めなかった。

D. 考察

大阪ではゲイボランティアによる予防啓発プロジェクトMASH大阪の展開する予防啓発プログラムの効果を評価し、また新たな予防啓発プログラムを模索するため、1999年から2004年までの間、毎年、北区堂山地区のクラブイベント参加者を対象とした質問紙調査を実施してきた。クラブ利用者という特定の集団であるが毎年同様のMSM集団の予防に関する知識や意識、行動を調査し、その年次推移を比較、検討することにより、各プログラムの有効性について検討してきた。ただ2005年は大阪市内のゲイバーの顧客を対象とした大規模調査や屋外型啓発イベントを実施したことから、クラブイベントでの調査は実施しなかったため、今回のクラブ調査は2年ぶりとなる。調査の実施手順は過去の調査結果との比較可能性を確保するため、大きく異なる点はない。調査を行ったクラブ数は対象者数を増やす目的からそれまでの1か所から2か所に増やしている。質問紙は2001年までA4版2ページで40問程度のものを使用していたが、協力を得て配布した質問紙が回収できなかつたり、無回答や白紙回答もかなり存在したことから、2002年からは25問程

度に質問数を減らしている。それ以降今回の質問紙も含めて質問数はほとんど変わっていない。質問内容は各年次のプログラムの展開に応じた若干の変更点はあるが、全体的に大きな違いはない。今回の調査で変更した点はドロップインセンター（DISTA）で開催する各プログラムや屋外型啓発イベント（PLuS）への接触状況、インターネットの利用状況、堂山地区への来所頻度、即日検査や自宅検査キットに関する知識、HIVSTIに関する相談相手についての質問を追加したこと、脱法ドラッグについての質問を削除したことなどである。堂山への来所頻度の調査は大阪地域のMSM人口を推計する基礎資料とするためでもある。

今回の研究目的は2006年に実施したクラブ調査のデータを用いて、コミュニティペーパー（SaL+）の受け取り経験と、予防に関する知識や意識、行動との関連の有無を検討することにより、MASH大阪の予防啓発プログラムの効果、影響について調査することにある。予防啓発プログラムにはSaL+以外にもドロップインセンター（DISTA）で開催するSTI勉強会などのプログラムや屋外型啓発イベント（PLuS）がある。大阪の予防啓発の効果を評価するためには、複数のプログラムへの接触状況との関連から検討することも考えられる。しかしこれらプログラムへの接触状況が相互に強く関連すること、DISTAやPLuSへの各々の接触状況と予防知識や意識、予防行動との関連についての分析結果がSaL+に関する分析結果とほとんど相違ないことから、今回SaL+以外のプログラムの分析結果は報告していない。

SaL+への接触状況別の集計結果をみると、二つの特徴がみられる。一つは、SaL+接触群の方がHIVSTI感染予防に関する知識の正答率が高く、過去の性行動の感染危険性や身近な陽性者の存在を自覚する人が多かったことである。またHIVSTI感染についての相談先として

DISTAスタッフや電話相談をあげた人が相対的多かったのも特徴としてあげられる。

もう一つの特徴は、予防行動の面ではコンドームの使用状況とSaL+接触状況との間に関連を認めなかったこと、抗体検査の受検行動の面ではSaL+接触群に受検経験者がやや多かったことである。コンドーム使用状況は、SaL+接触状況別にみても、相手が特定の相手であろうと不特定の相手であろうと両群の常用率に違いを認めなかったし、最後のアナルセックス時のコンドーム使用率にも違いを認めなかった。抗体検査の受検場所については主な受検場所は医療機関や保健所などで両群間に違いを認めなかったが、土曜午後の検査についてはSaL+接触群に多かった。

今回の分析からSaL+接触群の特徴をまとめると、HIV/STIの予防に関する知識は多いが、性行為時のコンドーム使用による予防行動が多いとはいえない。しかし感染リスク行為への自覚やHIVの知識が多いことから抗体検査を受検した人が多いという仮説が考えられる。つまりMASH大阪による予防啓発プログラムはコンドーム使用への効果、影響は認められなかったが、予防に関する知識や意識への変化を通じて受検行動への影響を及ぼした可能性のあることが示唆された。今後、性行為時の予防行動についてコンドーム使用以外の予防行動や行為時の意識や態度について調査することにより、予防プログラムの効果、影響を検証していく必要があると考えられる。

E. 結語

MASH大阪によるHIV/STI予防啓発プログラムの効果について評価するため、2006年のクラブ調査のデータを用いて、プログラムへの接触状況と、予防に関する知識や意識、行動との関連について検討した。その結果予防知識や意識、受検行動との関連を認めたが、コンドーム使用との関連は認めなかったことか

ら、予防啓発プログラムが予防に関する知識や意識と受検行動に効果、影響を及ぼす可能性が示唆された。今後、コンドーム使用以外の予防行動やそれに関連する意識や態度への効果や影響について調査する必要があると考えられる。

別表1 対象者の属性

	受取あり (%) n=204	受取なし (%) n=326	合計 (%) n=530	p値#
過去のクラブ調査への回答経験				
ない	157 (77.3)	299 (91.7)	456 (86.2)	<0.00001
昨年以前に回答経験あり	36 (17.7)	15 (4.6)	51 (9.6)	
わからない	8 (3.9)	12 (3.7)	20 (3.8)	
今年は○回目	2 (1.0)	0 (0)	2 (0.4)	
インターネット利用				
利用しない	13 (6.4)	24 (7.6)	37 (7.1)	0.02712
ときどき	50 (24.6)	111 (35.0)	161 (31.0)	0.01196 Wr
よく利用する	140 (69.0)	182 (57.4)	322 (61.9)	
年齢				
平均値(標準偏差)	28.7 (6.3)	29.3 (6.8)	29.1 (6.6)	
～24歳	62 (31.0)	82 (25.5)	144 (27.6)	0.3161
25～29歳	46 (23.0)	88 (27.4)	134 (25.7)	0.36012 Wr
30～34歳	52 (26.0)	71 (22.1)	123 (23.6)	
35～39歳	32 (16.0)	58 (18.1)	90 (17.3)	
40歳～	8 (4.0)	22 (6.9)	30 (5.8)	
居住地				
大阪	153 (75.0)	225 (69.0)	378 (71.3)	0.41777
兵庫	29 (14.2)	51 (15.6)	80 (15.1)	
京都	18 (8.8)	39 (12.0)	57 (10.8)	
その他	4 (2.0)	11 (3.4)	15 (2.8)	
セクシャリティ				
ゲイ	177 (86.8)	275 (84.6)	452 (85.4)	0.02084
バイセクシャル	23 (11.3)	46 (14.2)	69 (13.0)	
わからない	0 (0)	4 (1.2)	4 (0.8)	
その他	4 (2.0)	0 (0)	4 (0.8)	

#p値:WrはWilcoxonの順位和検定, その他は χ^2 検定による値.

別表2 HIV/STI予防に関する知識・意識

	受取あり (%) n=204	受取なし (%) n=326	合計 (%) n=530	p値#
HIV関連知識(正答率)				
HIVの延命治療について	169 (51.8)	131 (64.2)	300 (56.6)	0.00679
検査ウインドウ期について	237 (72.7)	168 (82.4)	405 (76.4)	0.01460
HIV迅速感染キットの誤反応	171 (52.5)	99 (48.5)	270 (50.9)	0.42946
コンドーム耐性について	147 (45.1)	128 (62.7)	275 (51.9)	0.00011
STI感染によるHIV易感染性	205 (62.9)	163 (79.9)	368 (69.4)	0.00005
梅毒の易感染性	256 (78.5)	178 (87.3)	434 (81.9)	0.01541
HIV/STI予防知識の正答数				
6問	45 (22.1)	45 (13.8)	90 (17)	0.00082
4-5問	103 (50.5)	142 (43.6)	245 (46.2)	
0-3問	56 (27.5)	139 (42.6)	195 (36.8)	
自身のエイズにかかる可能性				
絶対ない	11 (5.4)	48 (14.7)	59 (11.1)	0.00006
ほとんどない	64 (31.4)	100 (30.7)	164 (30.9)	
五分五分	44 (21.6)	82 (25.2)	126 (23.8)	
十分可能性があった	62 (30.4)	50 (15.3)	112 (21.1)	
わからない	23 (11.3)	46 (14.1)	69 (13.0)	
身近なHIV感染者の存在				
いる	69 (34.2)	84 (26.0)	153 (29.1)	0.00092
いると思う	51 (25.2)	51 (15.8)	102 (19.4)	
いないと思う	24 (11.9)	71 (22.0)	95 (18.1)	
いない	41 (20.3)	91 (28.2)	132 (25.1)	
わからない	17 (8.4)	26 (8.0)	43 (8.2)	

#p値:WrはWilcoxonの順位和検定, その他は χ^2 検定による値.

別表3 回答者の過去6か月間のアナルセックス時のコンドーム使用状況

	受取あり (%) n=204	受取なし (%) n=326	合計 (%) n=530	p値#
特定相手(タチ)でのゴム使用状況(n=286)				
常用	62 (56.4)	109 (61.9)	171 (59.8)	0.41772
非常用	48 (43.6)	67 (38.1)	115 (40.2)	0.25062 Wr
特定相手(ウケ)でのゴム使用状況(n=265)				
常用	68 (59.1)	90 (60.0)	158 (59.6)	0.98669
非常用	47 (40.9)	60 (40.0)	107 (40.4)	0.92137 Wr
不特定相手(タチ)でのゴム使用状況(n=256)				
常用	57 (61.3)	111 (68.1)	168 (65.6)	0.33396
非常用	36 (38.7)	52 (31.9)	88 (34.4)	0.41719 Wr
不特定相手(ウケ)でのゴム使用状況(n=242)				
常用	67 (65.7)	94 (67.1)	161 (66.5)	0.92100
非常用	35 (34.3)	46 (32.9)	81 (33.5)	0.96375 Wr
コンドームの使用状況(n=402)				
常用	84 (50.3)	138 (58.7)	222 (55.2)	0.11594
非常用	83 (49.7)	97 (41.3)	180 (44.8)	0.09457 Wr
最後のアナルでのコンドーム使用				
特定相手の場合(n=261)	56 (52.3)	70 (45.5)	126 (48.3)	0.33287
不特定相手の場合(n=227)	49 (55.7)	72 (51.8)	121 (53.3)	0.66368
過去6か月間のコンドーム購入経験(アナルセックス経験者のみ再掲)				
購入した経験あり	91 (45.7)	149 (48.4)	240 (47.3)	0.62269
なし	108 (54.3)	159 (51.6)	267 (52.7)	
購入場所				
ドラッグストア等	42 (21.1)	79 (25.6)	121 (23.9)	0.28672
コンビニ等	18 (9.0)	46 (14.9)	64 (12.6)	0.06983
ゲイショップ	28 (14.1)	23 (7.5)	51 (10.1)	0.02367
ハッテン場	18 (9.0)	19 (6.2)	37 (7.3)	0.29784

#p値: WrはWilcoxonの順位和検定, その他は χ^2 検定による値.

別表4 回答者の過去1年間のエイズ検査の受検状況とHIV/STIに関する相談相手

	受取あり (%) n=204	受取なし (%) n=326	合計 (%) n=530	p値#
エイズ検査の受検経験				
受検した経験あり	82 (40.2)	107 (32.8)	189 (35.7)	0.10283
なし	122 (59.8)	219 (67.2)	341 (64.3)	
受検場所の内訳				
病院・クリニック	27 (13.2)	39 (12.0)	66 (12.5)	0.76693
保健所・保健センター	32 (15.7)	45 (13.8)	77 (14.5)	0.63709
木曜の夜間検査	3 (1.5)	2 (0.6)	5 (0.9)	0.59512
土曜午後の検査	15 (7.4)	4 (1.2)	19 (3.6)	0.00056
日曜午後の検査	7 (3.4)	13 (4.0)	20 (3.8)	0.92605
名古屋のイベント検査	3 (1.5)	2 (0.6)	5 (0.9)	0.59512
その他	2 (1.0)	7 (2.1)	9 (1.7)	0.50529
HIV/STIについて相談場所の有無				
相談場所あり	192 (94.6)	299 (92.3)	491 (93.2)	0.40096
なし	11 (5.4)	25 (7.7)	36 (6.8)	
HIV/STIについて相談したい相手				
知り合いの医療関係者	24 (11.8)	46 (14.2)	70 (13.3)	0.51578
病院・クリニック	71 (35.0)	100 (30.9)	171 (32.4)	0.37594
保健所・保健センター	70 (34.5)	118 (36.4)	188 (35.7)	0.72012
distaのスタッフ	25 (12.3)	3 (0.9)	28 (5.3)	<0.00001
電話相談	26 (12.8)	24 (7.4)	50 (9.5)	0.05664
友人・知人	60 (29.6)	83 (25.6)	143 (27.1)	0.37396
その他	3 (1.5)	5 (1.5)	8 (1.5)	1.00000

#p値: WrはWilcoxonの順位和検定, その他は χ^2 検定による値.

行動ステージを用いたコミュニティでの HIV 予防啓発活動の評価 -大阪地域でのゲイ向け商業施設利用者への質問紙調査から-

研究協力者：金子典代¹⁾、大森佐知子¹⁾、木村博和²⁾、辻宏幸³⁾、鬼塚哲郎⁴⁾、市川誠一¹⁾

1) 名古屋市立大学大学院看護学研究科 2) 横浜市南福祉保健センター 3) 財団法人エイズ予防財団リサーチレジデント/MASH 大阪 4) 京都産業大学/MASH 大阪

研究要旨

本研究の目的は、1) 大阪地域のゲイ・バイセクシュアル男性におけるコンドーム使用の行動ステージの分布を明らかにすること、2) 行動ステージと検査行動、知識、感染リスク認識、ゲイ CBO の予防介入プログラムへの接触、HIV 感染予防への態度や規範の関連を明らかにすることである。質問紙調査はゲイ CBO が啓発資材を配付している商業施設の協力を得て実施し、601 件の有効回答を得た。コンドーム使用の行動ステージは 1) 無関心期、2) 関心期/準備期、3) 行動期/維持期の 3 群に分類した。行動ステージ別の検査受検、知識や感染リスク認識、ゲイ CBO のプログラムとの接触、HIV 感染予防への意識、態度や規範との関連を分析した。ゲイ CBO が配布した啓発資材の受け取り率は、全てのステージ群において 70-80%を超えていたが、勉強会や啓発イベント等への参加や認知、検査受検は、行動/維持期のものの方が他のステージより高かった。HIV 感染予防への態度、規範は、行動ステージと有意な関連が見られ、“周囲でコンドームを使用する友達が多くなった”といった規範を感じているものは維持期に多かった。また、HIV 感染の楽観視を身近に感じているものほど、その場限りの相手とのコンドーム使用において無関心期に近い行動ステージにあった。付き合いが長くなった時、ドラッグやアルコール使用時はコンドーム使用が困難に感じると回答したものの方が、無関心期に多かった。対象者におけるステージの分布と、各ステージ群別のゲイ CBO プログラムの浸透度を経年的に測定することで、介入が届いていない層の明確化と、予防啓発の評価が可能になると考えられる。

A. 研究目的

MASH 大阪では大阪地域の MSM(men who have sex with men)、堂山・新世界地域のゲイバーの利用者にターゲットをあて、コンドーム配布活動やエイズや性感染症に関する情報を盛り込んだコミュニティペーパーSaL+(MASH 大阪の啓発プログラムであるアウトリーチ資材のひとつで、コミュニティ情報に HIV/STI の予防情報をくるんだコミュニティ情報誌のこと、通称サルポジ、以下コミュニティペーパーSaL+とする)の配布活動を行っている。また、

これらの予防介入プログラムが HIV 抗体検査受検行動や HIV 感染予防行動にどのように影響しているか継続的な評価を行うため、ゲイ向けクラブイベントにおいて質問紙調査を 1999 年より継続的に実施してきた。しかし、これらのクラブイベントで実施する調査における質問項目数には限界があることや、クラブイベントの調査では回答者はクラブイベントの参加者となり、MASH 大阪が行ってきた介入プログラムの直接のターゲット層であるゲイバーの顧客と完全には一致していないという限界があった。そこで 2005 年はこれまで

MASH 大阪の予防プログラムの主のクライアントとしてきた堂山・新世界地域のゲイバーの利用者にむけた精密質問紙調査を実施した。質問項目には、過去のクラブイベント調査において用いた項目に加え、MASH 大阪のアウトリーチコンドームの受け取り経験と使用頻度、MASH 大阪のコミュニティーペーパー (SaL+) の購読内容と購読頻度、性感染症の既往、過去 6 ヶ月間のコンドーム使用、アルコール・ドラッグの使用、コミュニティーにおける HIV 感染予防行動の規範などについてもたずねた。特に、過去 6 ヶ月間のコンドーム使用行動に関する質問項目では、従来用いていた相手別のコンドーム使用頻度のみでなく、行動の変容段階(変化ステージ)という概念を取り入れた項目を取り入れた。この行動の変化ステージという概念では、対象者が望まれる行動を行っているかいないのかという行動の有無という側面に着目するのではなく、行動を維持できるまでにいたるプロセスや行動変容への意思も組み入れて行動をみる概念である。この概念を用いることにより、コミュニティーにおける行動変化ステージの様相を明らかにできるとともに、各変化ステージの層にどの程度予防介入が行き届いているのかを明確にでき、コミュニティーへの介入の効果を評価する上での指標となることが考えられる。

本研究の目的は以下の 2 点である。

1. 大阪地域の商業施設(ゲイバー)を利用するゲイ・バイセクシュアル男性におけるコンドーム使用の行動ステージの分布を明らかにすること
2. 行動ステージと検査行動、知識、感染リスク認識、HIV 感染者の身近さ、MASH 大阪の HIV 感染予防介入プログラムへの接触、HIV やエイズ予防への態度や規範の関連を明らかにすること

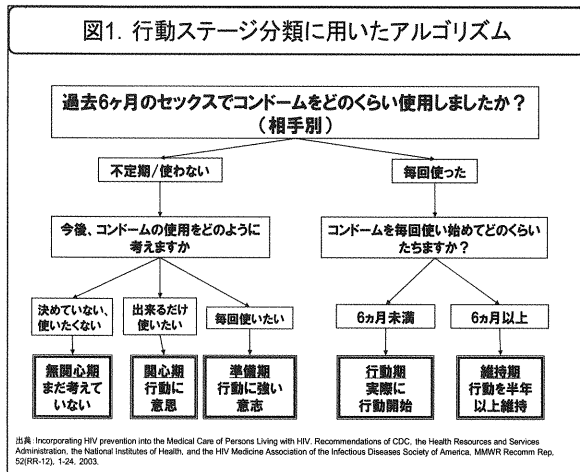
B. 研究方法

MASH 大阪がコミュニティーペーパー SaL+ および啓発用コンドームを毎月配布している商業施設に調査協力を依頼し、調査協力の同意が得られた 41 店舗に 1340 部の質問紙配布を依頼した。質問紙の配布・回収方法については、商業施設のオーナーから顧客への直接手渡しを依頼し、顧客からは直接郵送にて質問紙を回収する方法をとった。また MASH 大阪ドロップインセンター DISTA においても来場者に質問紙を配布し、直接郵送法にて質問紙を回収した。対象者には謝礼として商業施設で使用可能なチケットと抽選でアンダーウェアが当選する仕組みとした。全有効回答数は 601 (回収率 56.6%) であった。質問紙構成は (1) 基本属性、(2) MASH 大阪が行っている予防介入プログラムへの接触状況、(3) HIV 感染予防に関連する知識および意識、(4) HIV 抗体検査受検、(5) 性感染症の既往、(6) 性行為経験およびコンドームの使用頻度、(7) 性交時のアルコールおよびドラッグ使用の状況など全 40 問であった。本報告では、20 歳以上の自らの性指向をゲイまたはバイセクシュアル、わからないと自認している、または男性と性行為の経験があると回答した 546 名の回答のみを分析の対象とした。

コンドーム使用の行動ステージは、米国にてエイズ予防の分野でも活用されているアルゴリズム (図 1) を用いて、過去 6 ヶ月のコンドームの使用状況と今後のコンドーム常用の意図により、無関心期、関心期、準備期、行動期、維持期の 5 段階に特定、その場限りの相手別に分類した。本研究では、5 つのステージのうち、関心期と準備期、行動期と維持期はそれぞれ一つにまとめ、無関心群、関心/準備期群、行動・維持期群の 3 群に分類した。

相手種類別の、各行動ステージ別の過去 1 年間 HIV 抗体検査受検率、MASH 大阪の予防介入プログラムの接触・認知率、HIV 感染予防の規範や価値観との関連を分析した。データ

の集計および統計処理には SPSS11.5J (Windows)を用いた。



C. 結果

1) 対象者の基礎属性

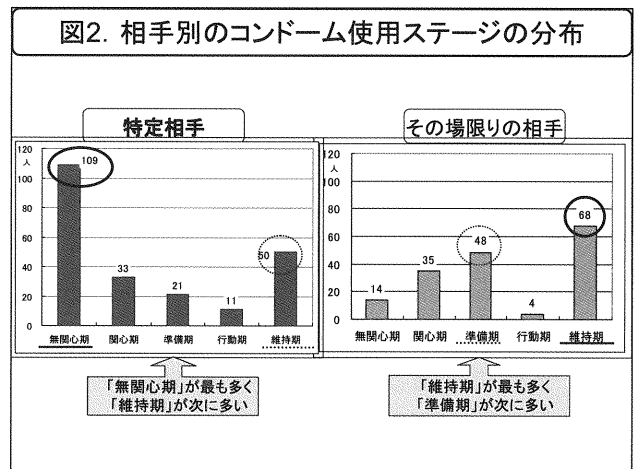
本研究の対象者の年齢層の分布は別表 1 の通りである。平均年齢は 33.9(±9.9)歳であり、最少年齢は 20 歳から最高年齢は 72 歳であった。本調査では比較的幅広い年齢層よりなる年齢の偏りの少ない対象者からの回答を得ることが可能であった。

2) コンドーム使用、意図、行動ステージ (別表 2)

特定相手、その場限りの相手別に過去 6 ヶ月のアナルセックス時のコンドーム使用頻度、今後毎回コンドームを使用する意図を尋ねた。過去 6 ヶ月に特定相手とアナルセックスをした 316 名のうち、コンドームを毎回使用したものは、86 名 (33.1%)、その場限り相手とアナルセックスをした 183 名のうち、コンドームを毎回使用したものは、79 名 (43.2%)であり、常用率はその場限りの相手とのアナルセックス時の方が高かった。過去 6 ヶ月アナルセックスの経験があったもの限定し、今後毎回コンドームを使用する意図を尋ねたところ、特定相手と毎回使用したいと回答した者は 86 名 (34.0%)、その場限り相手とは 120 名 (65.6%)が「毎回使用したい」と回答し、

いずれの相手においても「毎回使用したい」と回答した者が最も多かった。

コンドーム使用ステージの分布は、特定、その場限りのアナルセックスの相手別に異なり、特定相手とのアナルセックスにおけるコンドーム使用ステージは無関心期に最も多く 41.9%を占めており、次に維持期にあるものが 2 番目に多く 19.2%であった。その場限りの相手とのアナルセックスにおいては維持期にあるものが 37.2%と最も多く、準備期にあるものが 26.2%と 2 番目に多かった。(図 2)



3) 特定相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、予防プログラムへの接触 (別表 3)

過去 1 年の検査受検、感染リスク認識、HIV の身近さ、知識、MASH 大阪のプログラムと相手別のコンドーム使用ステージとの関連を分析した。特定相手とのアナルセックスのコンドーム使用ステージとは、HIV 感染リスク認識、MASH 大阪プログラムの認知、HIV 予防啓発イベント PluS+への参加の間に有意な関連が見られた。傾向性の検定では、感染リスク認識にのみ有意な関連が見られ、HIV に感染するリスク認識が五分五分または十分可能性があるという回答したの方が、無関心期にあるものの割合が高かった。アウトリーチを行っているコンドーム、啓発情報誌 SaL+の受け取

り・購読率はいずれの行動ステージにおいても高く 70-80%を超えていた。

4) その場限りの相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、ゲイ CBO の予防プログラムへの接触 (別表 4)

その場限りの相手とのコンドーム使用ステージについては、過去 1 年 HIV 抗体検査受検、HIV 感染リスク認識、コミュニティーセンター dista の認知に有意な関連がみられた。傾向性の検定では、過去 1 年受検経験、HIV に感染するリスク認識に関連が見られた。過去 1 年に検査経験があるものの方が、また HIV に感染するリスク認識がまったく/ほとんどないと回答した者の方が、行動・維持期にある傾向にあった。

5) 特定相手とのコンドーム使用ステージと HIV 感染予防に対する態度、規範 (別表 5)

特定相手とのコンドーム使用ステージと、HIV 予防に対する態度、周囲の規範の関連を調べた。「相手がコンドーム無しでセックスすることを望んだらコンドームをつけようといえなくなる」「付き合いが長くなるほどコンドームを使わなくなる」「ドラッグ使用時やお酒に酔っているときはコンドームを使ったセックスが難しい」といったコンドーム使用が難しくなる要因に関して「そう思う」と回答した人の方が有意に無関心期に近い行動ステージにあることが明らかになった。「どんなときでもコンドームを使ったセックスが出来ると思う」といったコンドーム使用の自信があるものの方が、より維持期に多い傾向にあった。「以前と比べてコンドームを使うゲイの友達が多くなった」周囲のコンドーム使用状況が予防に支援的な状況に対して「そう思う」と回答した人の方がより維持期に近い行動ステージにあった。

6) その場限りの相手とのコンドーム使用ステージと HIV 予防に対する態度、規範 (別表 6)

その場限りの相手とのコンドーム使用ステージとの関連については、特定相手とのコンドーム使用ステージで明らかになった関連要因と同じく「相手がコンドーム無しでセックスすることを望んだらコンドームをつけようといえなくなる」「付き合いが長くなるほどコンドームを使わなくなる」「ドラッグ使用時やお酒に酔っているときはコンドームを使ったセックスが難しい」といったコンドーム使用が困難に対して「そう思う」と回答した人の方が有意に無関心期に近い行動ステージにあった。「どんなときでもコンドームを使ったセックスが出来ると思う」「以前と比べてコンドームを使うゲイの友達が多くなった」と回答した人の方が、より維持期に多かった。

また、特定相手とのコンドーム使用ステージとは関連がみられなかったが、その場限りの相手とは「コンドームをつけるとエイズなどの病気を心配せずにセックスを楽しめる」「今はエイズになっても薬で長く生きる事が出来るため、コンドームなしのセックスに不安を持たない人が多い」と回答した人の方がより無関心期に近い行動ステージにあった。

D. 考察

本研究の対象者の背景については、年齢層の高いゲイ・バイセクシュアル男性が利用するゲイバーを含む 40 店舗からの協力へ得たことにより、過去に大阪地域で実施した調査と比較して、年齢層が高い層からの回答協力を得る事が可能となった。

コンドーム使用行動については、過去 6 ヶ月の使用頻度は、特定相手と常用していたものは 33.1%、その場限りの相手とは 43.2% であり、特定相手とは使用率が低い事が示された。また、コンドーム使用の行動ステージの分布はセックスの相別に異なり、その場限

りの相手とのコンドーム使用においては、維持期にあるものが 37.2% と最も多かったのに対し、特定相手との行動ステージについては、無関心期が 41.9% と最も多いことが明らかとなった。今後のアナルセックスにおいて毎回コンドームを使用する意図に関しては、特定、その場限りの相手いずれにおいても、「毎回/できるだけ使用したい」と回答したものが最も多かったが、行動ステージの分布を見ると、無関心期に近いものが多かった。特定相手とのアナルセックス時にもコンドームを「使用したい」と思いながらも、なぜ実際のセックスの場面では使用できないのか、その詳細な阻害要因や「使用したい」と思いながらも使えなかった状況の詳細について、また、どのような支援や環境があれば特定相手との使用が促進するのかを質的調査などから明らかにし、阻害要因を減らすための介入や環境整備を考えていく必要がある。

アナルセックスの相手の種類にかかわらずゲイ CBO 活動の認知やイベントの参加率は無関心期のものにおいて最も低かった。ゲイ CBO が配布するコンドームや予防情報誌の受け取り率はいずれの行動ステージにおいても 70-80% と全般的に高かった。予防情報誌には、HIV 抗体検査や HIV 感染予防、ゲイ CBO の予防啓発プログラムに関する情報が掲載されているため、多くのものがこれらの情報に接する機会があることが考えられる。しかし、啓発資材の全般的な受け取り経験は高いにもかかわらず、実際のプログラムやコミュニティーセンターの認知は低いことが明らかとなった。ゲイ CBO のプログラムやコミュニティーセンターを認知することで、プログラムに参加したり、コミュニティーセンターを訪れる層も存在することが考えられる。したがって、現在情報誌を受け取りながらも認知が少ない層において、予防や予防啓発プログラム

に関する情報は意図的に避けられてしまうのかなど、実際のプログラムの認知が低い理由を明らかにし、どのような情報提示の方法が無関心期の層にも届くために効果的なのかを明らかにしていく必要がある。

本調査では、HIV 感染予防に対する考え方、態度、規範についても尋ね、アナルセックスの相手別のコンドーム使用の行動ステージとの関連を分析した。その結果、特定、その場限りの相手双方の場合において「相手がコンドーム無しでセックスを行うことを望んだらコンドームをつけようといえなくなる」、「付き合いが長くなるとコンドームを使用しなくなりがちである」、「ドラッグやアルコール飲用時はコンドームの使用が難しい」といった考えに同意するものの方が、無関心期のステージにいる割合が高いことが明らかとなった。これらはいずれもセックスの場面での状況、相手との関係性、アルコールや薬物の使用によりコンドーム使用が難しくなることを示しており、個人レベルでの知識、感染リスク認識の向上に働きかける介入だけでは限界がある事を示唆している。相手が使用を望まなかったときにコンドームを使用するための対処法や交渉パターンの検証、パートナーとの交際期間が長くなると、どのような状況、要因からコンドーム使用が難しくなるのかといった不使用に至るプロセスをより詳細に検討し、使用が困難になりがちな状況においてもコンドーム使用の定着が促進するための対策を考えていく必要がある。

「以前よりコンドームを使うゲイの友達が多くなった」という周囲の予防行動の規範は特定相手、その場限り相手とも、コンドーム使用ステージと有意に関連しており、この予防に支持的な規範を感じているものの方がより維持期に近い行動ステージにいる傾向にあった。今後は、コンドーム使用に全く行動に関心がない無関心層にアクセスする方法、またこれらの無関心層をとりまく規範を変え

るためにはどこにアプローチし、どのような方法が効果的なのかを明らかにし、有効な介入を実施することが求められる。

「エイズ治療薬の出現により感染の不安を持つものが減ってきた」という考えに同意するものの方が、その場限り相手とのコンドーム使用において、無関心期に近い行動ステージに多くいることが明らかとなった。多剤併用のエイズ治療薬の出現により、延命が可能となったことで HIV 感染を楽観視するものが増加していることは西欧諸外国でも問題となっているが、日本でもこのような状況が増えることは十分に考えられる。治療薬によって延命は可能になったものの、HIV 感染症やエイズの治療において服薬は一生続ける必要があることや、様々な副作用の問題を正しく伝えるといった、HIV 感染症やエイズへの楽観視を低減するための方法を考える必要がある。

ゲイ CBO が予防啓発のアウトリーチ活動を行っている商業施設からの協力を得て、直接利用者に対して実施する大規模な精密な質問紙調査はわが国でも初めての試みであったが、60%以上の回収率により 601 件の回答を得ることが可能であった。今後も対象者への調査の周知方法や質問紙に改良を重ねることで、回収率の向上や年齢層の高い層からの更なる回答協力を得ることが可能になると考えられる。同様の質問紙調査を経年的に実施し、予防行動、検査受検行動、行動ステージとこれらの関連要因の実態を把握することで、ゲイ・バイセクシュアル男性に対するより詳細な HIV/STI 感染予防啓発活動の評価や予防サービスのニーズの明確化が可能になることが考えられる。この研究成果を踏まえ、予防活動の達成度の評価を継続的に実施し、介入が行き届いていない層を明確化するとともに、その層に対していかに効果的に働きかけるかを考案していく必要がある。またコンド-

ム使用の行動ステージに関連する要因をより明確にし、より対象者を維持期に向かうことを支援するにはどのような要因に働きかけることが効果的なのかを考慮に入れた予防活動を実施することが望まれる。

E. 発表論文等

研究論文等

1. 金子典代, 市川誠一, 辻宏幸, 後藤大輔, 塩野徳史, 鬼塚哲郎: 現場で使える! 健康教育ツールを開発しよう 第3回 計画(2): ツールをらせるものにするための最後の押さえどころ—MASH 大阪による健康教育資材の紹介, 保健師ジャーナル, 63(12), 1142-1149, 2007
2. 金子典代, 市川誠一, 辻宏幸, 鬼塚哲郎: 現場で使える健康教育ツールを開発しよう 第4回 作成: 対象者にひびくメッセージを作ろう, 保健師ジャーナル, 44(1), 82-89, 2008

国際学会発表

1. Noriyo Kaneko, Sachiko Omori, Hirokazu Kimura, Hiroyuki Tsuji, Tetsuro Onitsuka, Seiichi Ichikawa. The relation between gay bar customers' condom use and recognition of local prevention activities, The 8th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, Sri Lanka, 2007, Colombo.

国内学会発表

1. 金子典代, 大森佐知子, 木村博和, 辻宏幸, 鬼塚哲郎, 市川誠一: 大阪地域の予防介入プログラムの評価と HIV 感染予防行動の関連要因に関する研究, 日本エイズ学会, 2006 年, 東京

別表 1. 対象者の背景 (N=546)

	n	(%)
年齢		
29 歳未満	203	(37.2)
30 歳～39 歳	210	(38.5)
40 歳以上	122	(22.3)
無回答・非該当	11	(2.0)
性的指向		
ゲイ	475	(87.0)
バイセクシュアル	55	(10.1)
その他/分からない	11	(2.0)
無回答・非該当	5	(0.9)
居住地		
大阪府	380	(69.6)
大阪府をのぞく関西圏	125	(22.9)
その他	37	(6.8)
無回答・非該当	4	(0.7)
男性との過去 6 ヶ月のアナルセックス経験		
あり	316	(60.4)
なし	203	(38.8)
無回答	4	(0.8)
過去 6 ヶ月の特定相手とのアナルセックス経験¹⁾		
あり	260	(47.6)
なし	260	(47.6)
無回答	3	(0.6)
過去 6 ヶ月の<u>その場限りの</u>相手とのアナルセックス経験¹⁾		
あり	183	(33.5)
なし	337	(61.7)
無回答	3	(0.6)
過去 1 年間での HIV 抗体検査受検経験		
あり	154	(28.2)
なし	389	(71.2)
無回答・非該当	3	(0.5)
STI の罹患経験		
あり	161	(29.5)
なし	381	(69.8)
無回答・非該当	4	(0.7)

注¹⁾ 生涯に男性とアナルセックスをしたもの523名のみ対象

別表2. 性行動、相手別コンドーム使用の行動ステージ (N=260)

項目	n	(%)
特定相手との過去6ヶ月のコンドーム使用頻度¹⁾		
毎回使用(100%)	86	(33.1)
時々(25-75%)	60	(23.1)
ほとんど～全く使用しなかった(0%)	108	(41.5)
無回答・特定相手とはしていない	6	(2.3)
特定相手と今後のコンドーム使用の意図²⁾		
毎回・出来るだけ使いたい	129	(49.6)
あまり使いたくない・使いたくない	103	(39.6)
決めていない	21	(8.1)
無回答・非該当	7	(2.7)
特定相手とのコンドーム使用ステージ¹⁾		
無関心期	109	(41.9)
関心期	33	(12.7)
準備期	21	(8.1)
行動期	11	(4.2)
維持期	50	(19.2)
無回答・非該当	36	(13.8)
その場限り相手との過去6ヶ月のコンドーム使用頻度³⁾		
毎回使用(100%)	79	(43.2)
時々(25-75%)	54	(29.5)
ほとんど～全く使用しなかった(0%)	40	(21.9)
無回答・非該当	10	(5.5)
その場限り相手とのコンドーム使用の意図²⁾		
毎回・出来るだけ使いたい	269	(88.5)
あまり使いたくない・使いたくない	16	(5.5)
決めていない	17	(4.4)
無回答・非該当	3	(1.6)
その場限り相手とのコンドーム使用ステージ³⁾		
無関心期	14	(7.7)
関心期	35	(19.1)
準備期	48	(26.2)
行動期	4	(2.2)
維持期	68	(37.2)
無回答・非該当	14	(7.7)

注¹⁾ 特定相手と過去6ヶ月にアナルセックスを行った者のみを対象

注²⁾ 過去6ヶ月間にセックス経験があるものを対象

注³⁾ その場限り相手と過去6ヶ月にアナルセックスを行った者のみを対象

別表 3. 特定相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、予防プログラムへの接触

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ²⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
過去 1 年の HIV 抗体検査受検							
あり	36	(33.3)	21	(38.9)	25	(41.0)	0.572
なし	72	(66.7)	33	(61.1)	36	(59.0)	0.106
HIV に感染する可能性の認識							
絶対・ほとんどない	38	(40.9)	16	(31.4)	37	(67.3)	0.000
五分五分・十分可能性がある	55	(59.1)	35	(68.6)	18	(32.7)	0.005
HIV 陽性者の友人・知り合い							
あり	35	(32.7)	14	(26.4)	22	(36.7)	0.504
なし	72	(67.3)	39	(73.6)	38	(63.3)	0.784
HIV 感染予防の知識							
6 問中 4 問以上正答	25	(23.1)	13	(24.1)	14	(23.0)	0.988
6 問中正答 3 問以下	83	(76.9)	41	(75.9)	47	(77.0)	0.441
MASH 大阪プログラムの認知³⁾							
いずれか認知	31	(29.0)	26	(49.1)	21	(35.6)	0.044
すべて認知なし	76	(71.0)	27	(50.9)	38	(64.4)	0.170
コミュニティセンターの認知							
知っている	25	(22.9)	20	(37.0)	16	(26.7)	0.163
知らない	84	(77.1)	34	(63.0)	44	(73.3)	0.351
予防啓発イベントの参加							
参加	8	(7.4)	11	(20.4)	10	(16.7)	0.041
参加せず	8	(92.6)	11	(79.6)	50	(83.3)	0.035
MASH 大阪のコンドームキットの受け取り							
あり	79	(72.5)	41	(75.9)	48	(78.7)	0.658
なし	30	(27.5)	13	(24.1)	13	(21.3)	0.361
MASH 大阪の啓発情報誌 SaL+持ち帰り							
あり	47	(72.5)	31	(81.5)	32	(75.4)	0.454
なし	32	(27.5)	10	(18.5)	14	(24.6)	0.495

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる

注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す

注³⁾ コミュニティセンターで行われている 10 種類の予防啓発プログラムの認知についてたずね、1 つ以上認知していたもの、いずれも認知していなかったものの 2 群に分類した

別表 4. その場限り相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、予防プログラムへの接触

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ²⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
過去 1 年の HIV 抗体検査受検							
あり	0	(0.0)	21	(37.5)	25	(48.1)	0.006
なし	10	(100.0)	35	(62.5)	27	(51.9)	0.006
HIV に感染する可能性の認識							
絶対・ほとんどない	2	(25.0)	7	(13.2)	21	(43.81)	0.003
五分五分・十分可能性がある	6	(75.0)	46	(86.8)	27	(56.3)	0.007
HIV 陽性者の友人・知り合い							
あり	4	(40.0)	20	(36.4)	14	(27.5)	0.780
なし	6	(60.0)	35	(63.6)	37	(72.5)	0.211
HIV 感染予防の知識							
6 問中 4 問以上正答	6	(66.7)	43	(76.8)	38	(73.1)	0.780
6 問中正答 3 問以下	3	(33.3)	13	(23.2)	14	(26.9)	0.655
MASH 大阪プログラムの認知³⁾							
いずれか認知	1	(11.1)	24	(42.9)	13	(26.0)	0.063
すべて認知なし	8	(88.9)	32	(57.1)	37	(74.0)	0.779
コミュニティーセンターの認知							
知っている	0	(0.0)	22	(39.3)	15	(28.8)	0.042
知らない	10	(100)	34	(60.7)	37	(71.2)	0.354
予防啓発イベントの参加							
参加	0	(0.0)	8	(14.3)	9	(17.3)	0.361
参加せず	10	(100.0)	48	(85.7)	43	(82.7)	0.358
MASH 大阪のコンドームキットの受け取り							
あり	7	(70.0)	45	(80.4)	39	(75.0)	0.687
なし	3	(30.0)	11	(19.6)	13	(25.0)	0.838
MASH 大阪の啓発情報誌 SaL+の持ち帰り							
あり	8	(80.0)	45	(80.4)	40	(76.9)	0.905
なし	2	(20.0)	11	(19.6)	12	(23.1)	0.538

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す注³⁾ コミュニティーセンターで行われている 10 種類の予防啓発プログラムの認知についてたずね、1 つ以上認知していたもの、いずれも認知していなかったものの 2 群に分類

別表 5. 特定相手とのコンドーム使用ステージと HIV 感染予防に対する態度、規範

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ²⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
コンドームをつけると、エイズなど病気を心配せず安心してセックスを楽しめる							
そう思う	92	(84.4)	48	(88.9)	55	(91.7)	0.159
思わない	17	(15.6)	6	(11.1)	5	(8.3)	0.370
相手がナマ(コンドームなし)でのセックスを望んだら、コンドームをつけようと言えなくなる							
そう思う	66	(61.1)	23	(42.6)	13	(21.3)	<0.001
思わない	42	(38.9)	31	(57.4)	48	(78.7)	<0.001
付き合いが長くなると、コンドームを使うセックスをしなくなりがちである							
そう思う	95	(87.2)	38	(70.4)	27	(44.3)	<0.001
思わない	14	(12.8)	16	(29.6)	34	(55.7)	<0.001
どんな時であっても、コンドームを使ったセックスができると思う							
そう思う	41	(38.3)	36	(66.7)	51	(83.6)	<0.001
思わない	66	(49.5)	18	(50.9)	10	(24.6)	<0.001
ドラッグ使用時やお酒に酔っている時は、コンドームを使ったセックスをするのが難しい							
そう思う	54	(49.5)	27	(50.9)	15	(24.6)	0.006
思わない	55	(50.5)	26	(49.1)	46	(75.4)	0.003
エイズは薬で延命が可能となりコンドームなしのセックスに不安を持たないゲイの友達が多い							
そう思う	36	(33.0)	18	(34.0)	19	(31.1)	0.846
思わない	73	(67.0)	35	(66.0)	42	(68.9)	0.947
以前よりコンドームを使うゲイの友達が多くなった							
そう思う	54	(50.0)	41	(77.4)	48	(78.8)	<0.001
思わない	54	(50.0)	12	(22.6)	13	(21.3)	<0.001
以前よりゲイの友達の間では、HIV に対する偏見がなくなってきた							
そう思う	56	(51.9)	34	(63.0)	35	(57.4)	0.348
思わない	52	(48.1)	20	(37.0)	26	(42.6)	0.395

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す

別表 6. その場限り相手とのコンドーム使用ステージと HIV 感染予防に対する態度、規範

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ¹⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
コンドームをつけると、エイズなど病気を心配 せずに安心してセックスを楽しめる							
そう思う	8	(57.1)	68	(85.0)	67	(90.5)	0.014
思わない	6	(42.9)	12	(15.0)	7	(9.5)	0.006
相手がナマ(コンドームなし)でのセックスを望ん だら、コンドームをつけようと言えなくなる							
そう思う	10	(71.4)	42	(52.5)	18	(24.0)	<0.001
思わない	4	(28.6)	38	(47.5)	57	(76.0)	<0.001
付き合いが長くなると、コンドームを使うセックス をしなくなりがちである							
そう思う	14	(100)	61	(76.3)	32	(43.8)	<0.001
思わない	0	(0)	19	(23.8)	41	(56.2)	<0.001
どんな時であっても、コンドームを使ったセック スができると思う							
そう思う	5	(38.5)	36	(45.0)	58	(77.3)	<0.001
思わない	8	(61.5)	44	(55.0)	17	(22.7)	<0.001
ドラッグ使用時やお酒に酔っている時は、コン ドームを使ったセックスをするのが難しい							
そう思う	9	(64.3)	45	(56.3)	14	(18.9)	<0.001
思わない	5	(35.7)	35	(43.8)	60	(81.1)	<0.001
エイズは薬で延命が可能となりコンドームなし のセックスに不安を持たないゲイの友達が多い							
そう思う	8	(57.1)	25	(31.3)	18	(24.0)	0.041
思わない	6	(42.9)	55	(63.8)	57	(76.0)	0.045
以前よりコンドームを使うゲイの友達が多くなっ た							
そう思う	4	(30.8)	52	(65.0)	57	(78.1)	0.002
思わない	9	(69.2)	28	(35.0)	16	(21.9)	0.003
以前よりゲイの友達の間では、HIV に対する 偏見がなくなってきた							
そう思う	11	(78.6)	46	(57.5)	39	(52.7)	0.160
思わない	3	(21.4)	34	(42.5)	35	(47.3)	0.201

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す

RDS 法を用いた ‘hidden population’ に対する調査法の開発 —ゲイコミュニティのソーシャルネットワーク内での介入の浸透度の評価—

研究協力者：金子典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科/財・エイズ予防財団）

山本政弘¹⁾、牧園祐也²⁾、森田朋樹²⁾、Kyung-Hee Choi³⁾、辻宏幸⁴⁾、山田創平⁴⁾、
鬼塚哲郎⁵⁾、塩野徳史⁵⁾、後藤大輔⁵⁾、佐藤未光⁶⁾、河邊宗知⁶⁾、江島啓介⁶⁾、小浜
耕治⁷⁾、太田貴⁷⁾、Angel Life Nagoya、日高庸晴⁸⁾、市川誠一⁹⁾

1)国立九州医療センター 2)Love Act Fukuoka 3)UCSF Center for AIDS Prevention
Studies 4)MASH 大阪、財・エイズ予防財団 5)MASH 大阪 6)Rainbow Ring 7)東北 HIV
コミュニケーションズ 8)京都大学大学院医学研究科/財・エイズ予防財団 9)名古屋
市立大学大学院看護学研究科

研究要旨

本研究の目的は、1) リスポンデント・ドリブン・サンプリング法を援用した携帯電話による調査システムを開発すること、2) 開発したシステムを用いて、ゲイ CBO メンバーを中心とするソーシャルネットワークの特性と、ネットワーク内でのゲイ CBO の HIV 予防啓発活動の浸透度、HIV 感染予防行動や検査受検行動の定着度、予防規範の浸透度を明らかにすることである。

2006 年 12 月から 2007 年 6 月にかけて第 1 段階として福岡、東京、大阪にて調査を実施し、2007 年 12 月より第 2 段階として仙台、福岡（2 回目）、名古屋において調査を実施した。対象者のリクルートは各地域のゲイ CBO メンバーからゲイ・バイセクシュアル男性の友人に協力を依頼し、友達から友達へと紹介を拡げ、対象者を拡大させる方法を用いて第一段階では 233 名から有効回答を得た。第 2 段階では 128 名より有効回答を得ている。

第一段階の調査のデータ分析では、CBO メンバーから紹介を受けた階層を第 1 層、第 1 層から紹介を受けたものを第 2 層と、以後同様に階層分類を行い階層別の比較を行った。第 1 層、2 層、3-5 層の 3 階層間で比較すると、階層が遠方に行くほど予防啓発プログラムの認知率や HIV 陽性の友人がいる割合が有意に低くなること、特定相手とのコンドーム使用意図が低いこと、過去 6 ヶ月に会ったゲイの友達の数（ネットワークサイズ）が少ないこと、ネットワークメンバーとのセーフセックスに関する会話頻度が低いこと等が明らかとなった。

本研究より、CBO メンバーから距離の遠い層に向けてのアプローチの必要性が示された。今後も経年的に本調査を実施していくことで、介入の浸透度の評価が可能になると考える。また、本調査システムはコミュニティに顔を出すことが少ない層の実態把握に資するデータ収集が可能となる点、予防啓発プログラムの浸透度を明らかにし、活動の広がり进行评估できる点で有用である。

A. 研究の背景と目的

男性同性間の HIV 感染予防対策研究班では、予防介入の評価のために、商業施設を利用す

るゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした調査を実施してきた。これらの調査研究から、ゲイ CBO 活動や啓発資材の認知、性行動、HIV